

平成8年5月8日

21世紀のランナーズクラブ

—ある生涯ランナーからの提言—

余暇生活開発士養成通信教育課程、終了論文

学籍番号： 94F-P1-0139

氏名： 片芝 年信

1世紀のランナーズクラブ

ーある生涯ランナーからの提言ー

1章 日本のランナーズ事情

1976（昭和51）年ごろから始まった日本のジョギングブームは、その後着実に市ランナーの数を増やしてきた。

そして、42キロのフル・マラソンに飽きたりないランナー達は、100キロあるいはそれ以上の距離を走るウルトラ・マラソンに挑戦し、また、あるランナーは盲人ランナー伴走というボランティアの世界に向かう。

日本のランナー達は、多様化する価値観の中でそれぞれ自分に相応しい「走者の世界」求めている。

このような環境の中で、日本のランナーズクラブの草分けである二つのクラブの活動を較しながらかつて21世紀のランナーズクラブの理想像をさぐってみたい。

2章 「玉川上水ランナーズクラブ」と「牛久走友会」

玉川上水ランナーズクラブ（RC）は、1984（昭和59）年に東京、小平市で産声あげた。多摩川の羽村堰から取水し、東京の北多摩地区を西から東に貫流する玉川上水沿道を行き交っていたランナー達の輪が広がって生まれたクラブである。

牛久走友会は1979（昭和54）年に茨城県牛久市の教育委員会の呼びかけで発足し地域密着型のクラブである。このクラブは、1994（平成6）年9月に創立15周年記念イベントとして会員100人の参加による日本橋ー牛久縦走駅伝を開催し、地元新聞も写真入りで報道された。

玉川上水RCは、会員それぞれの個性豊かな走りを最大限尊重するグループであり、牛走友会は、会員が自動的に牛久市体育協会員となって、市民イベントなどへの参加を通じて地元に関わりかけ、マラソンの奨励発展を図ることを特色としている。（資料ー1、クラブの概要」参照）

3章 クラブの基盤と今後の方向

二つのクラブは、どちらも規則の緩やかな自由参加のクラブであり、個人の自主的な参行動を尊重する“未来型クラブ”の様相をそなえているが、その活動基盤を確かめ、今の方向について考えてみる。

－ 1 活動の基盤

－ 1－ 1 活動目的

玉川上水RCでは、発足当初ランニングを健康目的で楽しむ人と、競技としてのランニングを目的とするエリート主義が混在していたが、クラブの目的にそぐわない競技志向グループとは袂を分かつことになり、自分の健康のために走るランニング愛好者が残った。二つのクラブとも、核となる人物（会長とこれをサポートする人達）を中心に規約に定める目的、すなわち「ランニング愛好者の親睦と健康維持」（玉川上水RC）、「マラソンとウォーキングの奨励発展と同好者の親睦融和」（牛久走友会）を旗印としているが、それをしっかりと守っていくことがクラブの活動を進めるにあたって最も重要なことである。

－ 1－ 2 自主参画型運営

牛久走友会では、新春に行なわれる「牛久シティマラソン」の運営支援のため、会員がランナーとして参加するのを自粛し、大会事務局としてボランティア活動に専念することとしていた。これはその後、各自の判断にまかせられるようになったが、今でも自主的にランティアとして裏方に徹する人が圧倒的に多い。

また、玉川上水RCのイベント担当制では、自分で申し出た会員が、それぞれ担当する会やイベントの企画、当日の運営、懇親会のアレンジ等を年間予定の中に組み込んで行っている。この自主参画の精神と全員参加の分担運営意識とはクラブ運営にとっての基である。

－ 2 活動の方向

－ 2－ 1 ボランティア活動

1996（平成8年）4月21日、「第2回世界盲人マラソンかすみがうら大会」が土市で行われた。

往年のオリンピック代表選手に混じって多くのランナーが盲人ランナーをサポートする走ボランティアとして大会を支えた。

牛久走友会では、「老人と集う三世代の広場」（牛久市の少年、壮年、老年の三世代2人が交流するレクリエーション活動）への参加、「友情列車ひまわり号」（身体にハンディを持った人達と一緒に列車で旅行に出かけようという運動）への協力など、会員によるボランティア活動が好評を得ている。

ボランティア活動は、多面化するクラブの活動の一つの方向として積極的に進めるべき

応の基準とし、会の目的に沿ったものを選別のうえ実施していくことが望ましい。

－ 2 － 2 若年層への働きかけ

玉川上水RCでは若年ランナーの数が徐々に増え始めており、牛久走友会でも中学生や若い女性ランナーが参加している。しかし、二つのクラブとも40才以下の会員は少数というのが現状である。

若者のスポーツ離れが進んで、若い女性の場合ジョギング／マラソンへの参加率は減少しており、釣りやドライブが増えている。（余暇開発センター「余暇生活白書」）

彼女らにとってはカラオケボックスでの大騒ぎがニューススポーツであり、ただ黙々と走だけのクラブでは若者達には受け入れられない。

会のイベントや親睦会などに若者感覚をとりいれて、走ることの楽しさを若年層に広げいくことがこれからのランナーズクラブのひとつの役割である。

－ 2 － 3 地域との関わり

公共道路の使用について事故防止という観点から当局の許可が得られずに姿を消しているロードレースも多いが「牛久シティマラソン」は年々隆盛の途をたどっている。

牛久走友会の15周年記念誌（67ページ）に、新春の「牛久シティマラソン」に関する牛久市への提言が掲載されている。牛久市と一体となって市民スポーツの奨励発展をめす牛久走友会の生い立ちからみて地域への発言力は大きい。

民間クラブとして行政との関わり方の限界をどのように考えるかという問題はともかく、ランナーという専門家の立場からマラソン大会のコースや大会運営について建設的意見を述べることは歓迎されるべきことであり、「牛久シティマラソン」の場合こうした提言が大会の活性化に大いに貢献している。

－ 2 － 4 目的別分化の試み

牛久走友会では、クラブとして一体感を失わずに会員それぞれの目的とレベルに合わせ誰もが参加しやすい活動形態を模索している。平成7年にランニング部から分化してウォーキング部が創設され、平成8年にはランニング部のうち常に20キロ、30キロを走るグループを“強化部”という名称で発足させた。

将来のクラブの運営形態として前述の若年層への働きかけ（3－2－2）と合わせて、のような参加目的のバラつきを吸収するきめの細かい創意工夫を続けていく必要がある。

自由な、拘束の少ない仲間づくりを大切にすべきである。

第3章で述べた“クラブの基盤と今後の方向”を視野にいれながら、次のような点を更
申ばし、あるいは大事にしながら魅力あふれるランナースクラブをめざし、走ることを
うじて会員の親睦を深めていくのが“21世紀のランナースクラブ”の理想像である。

交流親睦

クラブの活動は、会員にとって愉快ものでなければならない。共通の趣味を絆とするラ
ンナースクラブとして会員相互の楽しい交流と親睦が大きな目的のひとつであることを忘
てはならない。

クラブと個人

会員はそれぞれ職業や家庭状況などが異なり、定年退職後の高齢者も増えつつある。い
にクラブの活動と個人の個別事情の折り合いをつけるかということがクラブにとって大
であり、プライバシーを守りながら本当に親しいランナーの集団となることが大事であ
る。

クラブの規模

クラブの過度の肥大化は望ましくない。地域を中心としてお互いに顔見知りとなり、親
を深められるのは40～50名、せいぜい100名位が理想的である。

ファミリー会員

二つのクラブには、親子、夫婦、兄弟会員もいて、なかにはランナーとして親を追い越
てしまった“親不孝会員”もいる。

大会での応援や親睦会をつうじて家族同士が親しくなり、家族ぐるみのクラブ化が進み
つあることは喜ばしい。

国際化

言語、文化、風習の違いを超越できるのがスポーツの世界である。玉川上水RCの10
年記念誌(40ページ)に、米国人会員が「僕がどうして走っているか正直に答えよう」
世界共通のランナーの心を述べている。

外国人にも疎外感を感じさせないクラブ作りを目指し門戸を開いて歓迎すべきである。

情報交換と広報

玉川上水R Cの会報「タマランだより」は、会員ランナーの情報媒体として毎月発行されている。会報購読のみの定期購読者制度もあり、会員の親睦のために大きな役割を果たしている。

添付資料：

- 資料－1 クラブの概要
- 資料－2 みんなで走って10年
(玉川上水ランナーズクラブ結成10周年記念誌)
- 資料－3 「走」15年の歩み
(牛久走友会15周年記念誌)

以上

資料-1、クラブの概要

	玉川上水ランナースクラブ	牛久走友会
創立	1984（昭和59）年	1979（昭和54）年
会員	24名（第1回総会） 47名（1996年）	20名（創立時） 122名（1996年）
目的	ランニング愛好者の親睦と健康の維持をはかるため、会員が自由に次の活動に参加できる 1）情報交換 2）練習会及び記録会 3）各種レースへの参加と支援 4）その他	マラソンとウォーキングの奨励発展と同好者の健康及び親睦融和を図ることを目的とする
加盟	陸上競技上部団体（東京陸協）へ加盟する	牛久市体育協会に加入し、会員は自動的に市体育協会会員となる
その他	会報「タマランだより」を毎月発行 家族会員制度、会報定期購読者制度あり	慶弔金 結婚 1万円 入院 5千円 死亡 1万円